

ヒッタイト・nuntarrijašha-祭りに関する 新資料について*

中 村 光 男

ヒッタイト王国の秋大祭である nuntarrijašha 祭に関する資料は、非常に断片的にのみ伝承されており、祭の過程の復元は今なお著しく不完全にとどまっている¹⁾。E. Laroche が彼の CTH (1971) に No. 626 として集成した断片は別として、近年幾つかの新しい断片が公刊または紹介され、大かれ少なかれ祭の過程のよりよい理解に貢献している。最近では、Ph. Houwink ten Cate がオッテン祝賀論文集 (1988) において、このテキスト・グループに関する幾つかの問題について、CTH 626 以外のテキストも利用して論じている。上述の論文集の刊行後も、ボアズキョイ文書の楔形文字コピーが既に二巻公刊されており、その中に nuntarrijašha 祭に属するものが幾つか見られる。本稿では、IBT IV²⁾ 中の幾つかの断片と LAAA 3 (1910) に公刊されながら殆ど顧みられていない一断片に限定して論じることとする。

1. KUB LV 5 + IBT IV 70 (CTH 626 I 4)

数年前に公刊された断片 KUB LV 5³⁾ は、祭の過程を日を追って簡潔な形で記述したいわゆる「概要タブレット」のグループに属するものであるが、KUB IX 16 や KBo III 25+ とは異なる日数の数え方をしており、この点ではむしろ IBoT II 8 に近い位置にある。さて、1988 年末に公刊された IBoT IV に含まれているテキスト (No. 70) については、この刊本のカタログの執筆者 H. A. Hoffner が既に1980年 (以前) に、AN. TAḪ, ŠUM—祭か nuntarrijašha—祭の「概要タブレット」であることを認識している⁴⁾、私見では、さらに特定することができ、この断片は、KUB LV 5 裏面 III 7' 以下に接続 (ジョイン) し、さらに3行分を与える。既に Ph. Houwink ten Cate が推定しているように⁵⁾、NIN. DINGIR—女神官 (3', 14' 行=IBoT IV 70, 8' 行)⁶⁾ が王と共に (8' 行=IBoT IV 70, 2' 行) 幾つかの神殿を訪れ、祭式を執り行なう⁷⁾。神名は残念ながら殆ど保存されていない⁸⁾。いずれにしても、これは裏面で少なくとも祭の3日分を記述した「概要タブレット」の一部を成す。その際、この部分が、やはり Houwink ten Cate が推測するように⁹⁾、KBo XIV 76 裏面 III 1'—12' 行と何らかの共通点を有するかどうかは、なお明らかではないままにとどまる。

2. IBoT IV 71

この断片は KBo XXII 228 (CTH 626 I 5), 特に 1'—6' 行を思い起こさせるものがある。

3. IBoT IV 80

H. A. Hoffner が既に彼のカタログ (XVI 頁または XXVIII 頁) で指摘しているように, この断片は KUB II 9 + KUB XX 50 + KUB XXV 19 + (CTH 626 III B + B') 裏面 VI² 20'—31' 行と接続 (ジョイン) する。但し, M. Eren のコピーでは, 22' 行と 23' 行間及び 27' 行と 28' 行との間にあるべきはずの節を分ける罫線が欠けているのは何故か不詳である。

19' I NINDA. KU₇ B [A. BA. ZA ŠA² UP-NI]

20' I DUG_hal-u [a-at-t] al [-la LĀL]

21' I DUGKUR₄. KU [R₄ G] Ú GÍD. DA GE [ŠTIN]

22' A-NA DINGIR M^[E]š É. DINGIR^{LIM} da [-a-i]

23' I NINDA. KU₇ BA. BA. ZA ŠA UP-N [I]

24' DUG_hal-ua-at-tal-la LĀL

25' I DUGKUR₄. KUR₄ GÚ GÍD. DA A-NA AŠ-[RI^{HI} A]

26' ir-ḥa-u-ua-an-zi ti-ja-a [n-zi]

27' nu AŠ-RI^{HI}. A ir-ḥa-an-z [i]

28' ku-u-uš-ma NINDA. KU₇^{HI}. A DUG_hal-ua-ta [l-la]

29' DUGKUR₄. KUR₄^{HI}. A an-na-la-za

30' Ú-UL e-eš-ta [d] [UTU^{ŠL}-at-kán]

31' ^mTu-ut-ḥa-l [i-i] a-a [š LUGAL GAL]

32' [D] UMU ^mḤa-at-tu-š [i-li LUGAL GAL]

33' [EGI] R-an-[da] [d] a-a-iš

20' 行: DUG_hal_uattalla-, この語の語源については A. J. Van Windekens, Gs KERNs (1981) 329頁以下を見よ (<* H₂el-; ḥi-el-ua-ta-al-la KUB XVII 37 I 6 を参照。これについては E. Laroche, RA 46 (1952) 162頁を見よ)。また N. Van Brock, RHA 71 (1962) 89頁及び S. Košak THeth 10 (1982) 173頁及び J. Tischler, HEG I, 139頁も参照。

21' 行: DUGKUR₄. KUR₄. この語の見える箇所は Y. Coşkun, Boğazköy Metinlerinde Geçen Bazı Seçim Kap İsimleri, Ankara 1979, 59—62頁 (DUG_hAB. ḤAB) に集められている。アッカド語 KUKKU (B) RU との同定は, F. Sommer — H. Ehelolf (Pap (1924) 57頁) によって提

案され、一般に受け容れられていたが¹⁰⁾、O. Carruba (StBoT 2 (1966) 10頁以下) は KBo XIII 144 II 16行以下 (// KBo XV 24 II 46'行)¹¹⁾ において両語の並んで現われることを理由に部分的に疑問に付した¹²⁾。

このロゴグラムのシュメール読みに関しては、B. Landsberger は、MSL VII (1959) 82頁、111行を diri V 266行: [ḥa-ab-ḥa-ab]=[DUG. ḤAB. ḤAB]=ḥap-ḥap-pu に基づき、[dug]. ḥab. ḥab=[ŠU-pu] (つまり DUGḤAB. ḤAB=ḥaphappu)¹³⁾ と復元していたが、MSL IX (1967) 189頁以下では、新しい断片 S₂₉ の記載項目: dug. LAGAB kur[kurLAGAB]=[ŠU-ru] に基づいてそれを訂正し、正しい等式 DUGKUR₄. KUR₄=gugguru を 111 行に設定し、かつこの記載項目を 87—89 行の gugguru と同一視した¹⁴⁾。項目 87行~90 行が等式 dug. níg. ta. kur₄=gu-ug-gu-ru=ku-ku-pu を与えるので、少なくとも間接的に DUGKUR₄. KUR₄=kukku(b)bu¹⁵⁾ が得られる。このことは Sommer—Ehelolf の DUGḤAB. ḤAB と DUGKU-KU-BU の両表記の異本間の交替とアッカド語語尾の補い DUGḤAB. ḤABBU に基づいた同定を確認することになる。O. Carruba があげたケースは、恐らくシュメログラムとアッカドグラムとの表記上のユレによるものであろう。もっとも両方の容器名が全く同一ではない可能性も排除はできない¹⁶⁾。

ここに翻字した節のうち最後のものは、E. Laroche によって1975年 Tudḥaliia IV 世のいわゆる祭儀改革の関連で扱われている¹⁷⁾。そこでの翻字はこの追加断片の故に上記のように改められる。

「(28' 行) しかしこれらの甘いパン, ḥaluattalla- 壺, (29' 行) (及び) 水差しは以前はなかった。『私の太陽』(31' 行) Tudḥaliia, 大王, (32' 行) 大王 Ḥattušili の子がそれらを後になって「置いた。』¹⁸⁾

しかし既により以前に彼の前任者たちも nuntarrijašḥa- 祭を改定または拡大することに努めている。Ḥattušili III 世は祭の少なくとも一部を規定し直した。KBo XXX 77裏面 IX 20'—24' 行の箇所は ^dIB に対する儀式の改定をこの王に帰している。彼の父 Muršili II 世も KUB IX 16 (CTH 626 I 1 A) 裏面 IV 2'—10' 行の述べるところによれば、多分ある戦役の後 nuntarrijašḥa- 祭を改定した¹⁹⁾。Šuppiluliuma I 世の治世に関しては、この祭に関する直接の言及はないが、彼の息子 Muršili II 世の報告によれば春の AN. TAḤ. ŠUM—祭を開催しており²⁰⁾、また遅くとも Muršili II 世が春秋の両祭を開催している (註19) 時、既に Šuppiluliuma I 世が秋における、AN. TAḤ. ŠUM—祭の対応物としての nuntarrijašḥa- 祭を挙行していたと推測することが許されるであろう。祭の一部は例えば言語上古期ヒッタイトの KUB XI 34 (CTH 626 V 1 A) が推測させる²¹⁾ように、恐らく古ヒッタイト時代にさかのぼるであろう。

4. IBoT IV 81

この断片が KBo III 25 + (CTH 626 I 1 B) と接続するかどうかという H. A. Hoffner が彼のカタログ (XVI または XXVIII 頁) で出した問いは肯定的に回答されなくてはならない。この新しい断片は表面第 I コラムの最初の 7 行の右の部分を与える。その際、本文は H. Otten—Chr.

Rüster (ZA 64 (1975) 246頁) の復元とはやや異なる。

Vs. I

1 [ma-a-a]n LUGAL-u [š la-aḥ-ḥa-az ú-iz-zi A-N]A DINGIRMEŠ

2 [EZE]N nu-un-tar-ri-ḫ [a-aš-ḥa-aš i-ḫ] a-zi

3 URUKa-a-ta-pí I-NA [UD. IKAM šal-li a]-še-eš-šar U [D?. IKAM]

4 lu-uk-kat-ti-ma ḏZi-it-ḥ [a-ri-ḫa-aš] I-NA É-r [i?]

5 [pa-iz-z]i nu-uš-ši DUMU. LUGAL EG [IR-an pa-i] z-zi nu EZE [(N-ŠU)]

6 [(I-NA É. GAL^{LIM}-m)] a? šu-up-pa ḡa-a [r-pu-] u-ḡa-ar U [(D?. IIKAM)]

7 [(lu-uk-kat-ti-ma-) a] z LUGAL-uš ḏU NIR. GÁL [i-ḫ] a-zi EGI [R-(an-da-aš-kán)]

8 [(ne-ḫa-at-t)] a-at ḏZi-it-ḥa-ri [(-ḫa-aš URUḤa-ak-ku-ra pa-iz-zi)]

9 [pa-r] a-a-ma-aš URUTa-ta-šu-n [(a pa-iz-zi UD. IIIKAM)]

4行: Éの後の字は先行する I-NA にかかわらず, 異本 KUB IX 16表面第4行において I-NA Éのあとに残る小さなスペース²³⁾ と並行箇所 ABoT 14+ V 12'—20'行²⁴⁾ で14'行にはっきりと I-NA É—ŠU とあるのを見ると, 多分 —r [i] と読まれるべきである²⁵⁾。É ḥu[-uḥ-ḥa-aš]²⁶⁾ である蓋然性は少ない。

5. LAAA 3, No. VI.

1910年に Th. G. Pinches は, Liverpool に所蔵されている9点のポアズキョイ文書を公刊した²⁷⁾。しかし一般にはあまり注意を惹かなかったようである。これらの断片の中に nuntarrijašḥa-祭の名を挙げているものがある。これ (Pl. XXVII / VI 及び 105頁) は右側のコラムの一部 (縁を含む) を成す小断片である。

x + 1 [—] zi
2' [—] ma? x ²⁸⁾
3' []
<hr/>	
4' [] x-「š」 a? -ra-az ²⁹⁾
5' [—] zi
6' [ḡ] IŠŠUKUR ḏKAL ³⁰⁾
7' [—] zi

ヒッタイト祭に関する新資料について

8'	[EZEN nu-un-tar-]	ri-ja-aš-ḫa-aš
9'	[] x
10'	[URUZi-i]	p-pa-la-an-da
11'	[EZEN nu-]	un-tar-ri-ja-aš-ḫa-aš
12'	[É(. GAL) A-B]	U BI-TI-pát
12'a?	[]
<hr/>			
13'	[] URUḪa-at-tu-ši
14'	[] UR] UNe-ri-ik
15'	[]-pát

(以下欠)

8'—13'行の節は祭名 [E ZEN n]untarrijašḫaš (8', 11'行), 都市名 [Zi]ppalanda (多分 [dU URUZi] ppalanda と補う?) (10'行), ABU BĪTI「家令」(12'行)の言及により特に KBo XIV 76 (CTH 626 I 3) 表面 I 5'—11'行 (// KBo XXII 228 (CTH 626 I '5', 7'—12'行)を思い出させる。しかし次の節(14'行以下)は, 同じく KBo XIV 76 表面 I の 3'—4'行及び KUB X 48+(CTH 626 I 1 B, 上述第4節)表面 II 20—23行(「第16日」)を思い起こさせる。しかしながらさしあたり, この断片が CTH 626 I に関係づけられるべきものかどうかは疑問である。私見ではむしろ, CTH 568³¹⁾のようなテキスト・グループに分類する方がより適切であるように思われる。ここでは神々や祭祀対象となる様々なものに対する祭祀上の準備(供物)が問題となっているのである(CTH 568 A III 以下頻出)³²⁾。

註

* 本稿に用いた略号は Chicago Hittite Dictionary, Chicago 1980 ff. または J. Friedrich—A. Kammenhuber, Hethitisches Wörterbuch, zweite, völlig neubearbeitete Auflage, Heidelberg 1975 ff. のものである。本稿は1989年11月30日に脱稿した。草稿に目を通して下さった G. ヴィルヘルム教授(ヴェルツブルク大学)にこの場を借りて謝意を表します。

- 1) H. G. Güterbock, JNES 19 (1960) 89頁; 同, JNES 20 (1961) 90頁; 同, NHF (1964) 68頁; 同, CRRAI XVII (1970) 177頁; V. Haas, KN (1970) 52-57頁 E. Laroche, CTH (1971) No. 626; 同, RHA XXX (1972) 115頁 (No. 626); S. Košak, Linguistica XVI (1976) 55-64頁; V. G. Ardzinba, Ritualy i Mify Drevnej Anatolii, Moskva 1982, 18-26頁; Ph. H. J. Houwink ten Cate, Kaniššuar = FsGÜTERBOCK² (1986)95-110頁; FsOTTEN² (1988) 167-194頁; C. Karasu, Belleten LII/203 (1988) 407-428頁; M. Popko, AoF 13/2 (1986) 219-223頁.
- 2) M. Eren, İstanbul Arkeoloji Müzelerinde Bulunan Boğazköy Tabletleri IV, Ankara 1988.
- 3) Ph. Houwink ten Cate, FsGÜTERBOCK², 95³, 100頁及び註14; 同, FsOTTEN² 頻出; S. Košak, ZA 76 (1986) 131頁; A. Ünal, BiOr 44 (1987) 476頁.
- 4) H. A. Hoffner, IBoT IV, XXVIII頁.

- 5) Houwink ten Cate, FsOTTEN², 188頁。
- 6) NIN. DINGIR に関しては, Fr. Pecchioli-Daddi, Mestieri (1982) 419-424頁; 同, Hethitica VIII (1987) 361-379頁; 同, Eothen I (1988) 193-206頁; 同, OA 26 (1987[88]) 37-57頁; Sh. Bin-Nun, THeth 5(1975)191頁以下註136を参照。さらに Emar 出土の NIN. DINGIR の “intronisation” 儀礼を参照の事, D. Arnaud, Emar VI/3 (1986) 326-337: No. 369 を見よ。メソポタミアの NIN. DINGIR に関しては, J. Renger, ZA 58 (1967) 134-149頁。
- 7) 9'行=IBoT IV 70, 3'行: nu ša [1-1] i a-še-eš-šar [j 10'行=同, 4'行=EZE 𐎠𐎺𐎠𐎵 I-NA É [? ijazi]. EZEN に当たるヒッタイト語の単語は通性である。添えられた語尾表記 EZEN-an (単, 対格, 通性 (KBo II 5 III 17; KBo III 7 I 14; KUB X 93 IV 4; KUB XIII 4 III 43; KUB XVII 10 I 19; KUB XIX 37 II 47), EZEN-aš (単, 主格, 通性 (KUB XIII 4 I 45行; KUB XXXVI 97 表面 5'行; H. Otten, OLZ 51 (1956) 103頁を見よ), EZEN-ni (単, 与格) (KUB XXXVI 97 IV 4行) を参照。EZEN のヒッタイト語読み (の一つ) として, I. Singer (StBoT 27 (1983) 45頁) は šijamana- (通性) を一定の留保をつけつつ提案した。これに当たるルウィ語は, i-語幹である。E. Laroche, BiOr 11(1954)124頁及び DLL (1959) 120 を見よ。
- 8) Hoffner の補い, ^dZ[i-pár-ya-a] (XXVIII頁) は必ずしも確実ではない。^dZ[i-it-ḫa-ri-ia] も少なくとも言及に値する。
- 9) Houwink ten Cate, FsOTTEN², 188頁。
- 10) MSL VII (1959) 82頁, 111行及び註; HW¹ 309頁, 344頁; 2. Erg., 30, 33頁; AHw 500b頁; CAD K 499頁; H. M. Kümmel, WdO 7 (1973-74) 294頁。但し kukku(b)bu は既に aB 期に現われている。F. R. Kraus, AbB X (1985) 63頁, Nr. 55, 8行及び註bを見よ。
- 11) KUB XLII 19 表面 2行, 6行。
- 12) ^{DUG}KUKKU(B)BU とヒッタイト語 ^{DUG}kattakurant- が同一であると J. Holt (BiOr 15 (1958)151頁) が主張したが, これも疑問視されている。O. Carruba (StBoT 2, 11) は ^{DUG}ḫanešša- を一候補としてあげている。
- 13) エブラ文書中に見える ḫa-ba-ḫa-ba-ga/ḫa-ba-ḫa-bi 「あなたの/私の ḫ。」 (M. Krebernik, Die Beschwörungen aus Fara und Ebla, Hildesheim 1984, 134頁) との比較に関しては, P. Xella, SEL III(1986) 19頁を見よ。
- 14) G. Pettinato, MEE 4 (1982) 304: 938-9; 及び AHw 296a頁を参照の事。
- 15) MSL IX 190頁; CAD K (1971) 563-4頁はこれに従う。AHw 1559a, 1567a頁 (補追); S. Košak, THeth 10, 102-3頁。
- 16) 例えば鉄製の ^{DUG}KUKKU(B)BU は知られるが (J. Siegelova, Eisen (1984) 106-7頁), 鉄製の ^{DUG}KUR₄ KUR₄ は知られない (Coşkun, Kap Isimleri, 60頁)。
- 17) E. Laroche, La réforme religieuse du roi Tudhaliya IV et sa signification politique, in: F. Dunand -P. Lévêque (Edd.), Les syncrétismes dans les religions de l'Antiquité, Leiden 1975, 87-95頁, 特に89頁。
- 18) A. Ünal, BiOr 44 (1987) Sp. 478-9.
- 19) この他 Muršili II 世の年代記の一断片 (KBo XVI 15, 6-7行) が場合によっては (秋における) nuntar-rijašḫa- 祭に言及している (Ph. Houwink ten Cate, JNES 25 (1966) 169, 177, 185頁を参照)。同じ年代記の他の断片において, Muršili II 世は (KBo VII 17 + XVI 13 I 3-4行) 翌春, AN. TAḫ. ŠUM-祭を挙行了たことを報じている。
- 20) KUB XIX 22, 1-2=Ph. Houwink ten Cate, JNES 25 (1966) 27頁。
- 21) 後代の追加部分として特に CTH 626 IV があげられる。そこでは, 死去した王妃たち (Ualanni, Nikal-mati, Ašmunikal, Duduhepa, Ḫenti, Tawananna) の Arinna の太陽神に犠牲・供物が献げられる。Ualanni

の問題性は解明されないままであるが、これについては別の所で立入るであろう。

- 22) H. Otten—Chr. Rüster, ZA 64 (1975) 246-7 頁。
- 23) 例えば第4行または第6行において、各行の最後の字は損傷してはいるが、それとしてわかるものであるので、それに従い、第5行においてはÉの後にあと一字しか想定できない。Ph. Houwink ten Cate, FsGÜTERBOCK², 100頁註16は、^aZitharriaš I-NA É-[ŠU] paizzi と読む。S. Alp, Beitr 180頁の読み (É[^DZi-it-ḫa-ri-ia-aš?]) (C. Karasu, Bell. LII/203 (1988) 410頁 (註11) はこれに従う。) は既に上述の理由により殆ど不可能である。
- 24) (12')^aUTUŠI-ma ku-ua-pi la-aḫ-ḫa-az ne-ia-ri/(13') nu ^aZi-it-ḫa-ri-ia-an ku-ua-pi/(14') I-NA É-ŠU tar-na-an-zi/(15') nu-uš-ši EZEN ku-in i-ia-an-zi/(16') nu X MÁŠ. GAL ḫal-ku-eš-šar IŠ-TU É. GAL/(17')A-BI ^aUTUŠI pi-an-zi an-tu-ua-aḫ-ḫa-an-ma/(18') ku-in IŠ-TU É. GALLIM A-NA DINGIRLIM/(19') [EGI] R-an u-i-ia-an-zi nu-kán GALḪIA/(20') a-pa-a-aš aš-nu-zi; Ph. Houwink ten Cate, FsOTTEN², 181頁。
- 25) I-NA É-r [i-iš-ši] と補うべきか? J. Friedrich, HE I² § 361; H. Ehelolf, ZA 43 (1936) 185¹; E. Neu, Lok (1980) 28-30頁を参照。
- 26) É(GAL) ḫuḫḫaš「祖父の家」については最近では、A. M. Dinçol, Bell. LIII/206 (1989) 47-8 頁を見よ。出典箇所についてはさらに J. Friedrich, SV II 88² に及び 168 頁 (註3も) を見よ。そこにあげられている断片 Bo 2687 (Tuthaliya (IV世) の É ḫuḫḫaš (Ḫattuša での) における夢に言及している) は、K. K. Riemschneider によって KUB XLIII 55 として公刊された。この断片の分類については E. Laroche, RHA XXX (1972) 108 (CTH Suppl. 434, 6) 及び H. Berman, FsGÜTERBOCK², 34頁及び註2を見よ。KBo VIII 110, 5行及び KUB XI 10, 7行をさらに参照。
- 27) LAAA 3 (1910) 99-106頁及び図版 XXVI-XXVIII.
 No. I=VBoT 108
 No. II=Liv. 49. 47. 42; Gallazzuqa の Šarruma 及び IŠTAR に対する (Ḫattuša における) 祈願; J. de Roos, JEOL 25 (1987) 67-74頁; 同, Hettitische Gelofen (Diss. Amsterdam 1984) 318-9 頁, 457-8頁。
 No. III=フルリ語テキスト。
 No. IV; 人名 ^mKu-ua-a [r-] という読みは、ヒッタイト語文書中では、人名中の表音表記された神(名)的要素に神に対する決定詞が付加されることがないので疑問である。^mRe-a-ma-še-ša-ma-a-i-^aA-ma-na (NH 1068), ^rPu-du-^aḪé-bat (NH 1063) のような表記は、Boğazköy ではアッカド語文書にしか見られない。但し NH 84 及び J. Tischler, FsNEUMANN (1982) 445 をなお参照。
 No. V: CTH 802, 2; R. D. Biggs, Ancient Mesopotamian Potency Incantations (TCS 2) 1967, 60-61頁を見よ。
 No. VII: 祭礼文書, 3'行 ^aḪal-ma-šu-「it」-[-]。
 No. VIII: 3'行: ŠA É. LUGAL ar-kam-mu-u [š; J. Friedrich, SV I 34頁。arkamma(n)- 一般については A. Kammenhuber, HW² I, 303-4頁及び最近では小野哲, オリエント XXXII (1989) 82-92 頁; a. は Tuthaliya IV世の条約中にも見える, H. Otten, StBoTB 1 (1989) 48頁 (II 23行)。
 No. IX: CTH 568 'H', A V 12'-20'行と並行, H. Berman, JCS 34 (1982) 123頁参照。Ph. Houwink ten Cate, FsOTTEN², 170⁸ をも参照。
- 28) Pinches は GAL と読む。
- 29) 地名?
- 30) GIŠŠUKUR ^aKAL「守護神の槍」: AN. TAḪ. ŠUM—祭のテキスト (CTH 612: KBo IV 9 v 14行; KBo XIV 35 I 8行; KUB XXV 1 I 10行; M. Popko, Kultobj (1978) 103-4頁参照) や KI. LAM—祭のテキスト (KBo XXVII 42 II 25行=I. Singer, StBoT 28, 57頁, 1. j. B.) において、それに供儀される

中村光男

祭儀対象として言及される。そこでは、槍に対し甘いパン (NINDA. KU₇) がちぎられる。逆の語順 (d KAL GIŠSUKUR) は KUB X 21 表面 II 5 行に見られる: (4) ...GAL DUMUMEŠ É. GAL-ma-an (= NINDA. KUR₄. RA KU₇, 2 行) (5) A-NA dKAL GIŠSUKUR pár-ši-ja...; F. Sommer, ZA 46(1940) 25 頁。Huqaššanna-儀礼においてもこの神またはこの神のシンボルは見られる (KUB XLVI 18 表面 14' 行; また 19 裏面? 10' 行; H. Otten, ZA 66 (1976) 299 頁; J. Siegelova, Eisen (1984) 136 頁を参照)。KUB XL 110 裏面では dKAL GIŠSUKUR が現われる際、パンの供献ばかりでなく、飲料の供献 (リュトンによる) が行われる (2'-3' 行); このテキストについては、H. Otten, IM 17 (1967) 58 頁を参照。

[補追: P. Cornil, OLP 19 (1988[1989]) 20-21 頁をも参照されたい。]

- 31) 註27, No. IX を見よ; I. Singer, StBoT 27 (1983) 134-6 頁参照。このテキスト・グループは、神託うかがい (様々な祭に関する) や指示、祭儀目録 (?) を含んでいるが、独立に全ての異本を考慮した上での徹底的な考究が必要である。
- 32) CTH 629=KUB XXV 27 もこの関連で考慮に加えられるべきである。

Einige Fragmente des hethitischen nuntarrijašḫa Festes*

Mitsuo NAKAMURA

Da die Texte zum hethitischen nuntarrijašḫa-Fest, dem großen Herbstfest, nur sehr bruchstückhaft auf uns gekommen sind, ist die Rekonstruktion des Festverlaufs noch immer weitgehend unvollständig¹⁾. Abgesehen von den Fragmenten, die E. Laroche in seinem CTH (1971) unter Nr. 626 zusammengestellt hat, sind mehrere Fragmente in den letzten Jahren veröffentlicht bzw. bekanntgemacht worden, die mehr oder weniger zu einem besseren Verständnis des Festverlaufs beigetragen haben; zuletzt hat Ph. Houwink ten Cate in FsOTTEN²⁾ (1988) mit gewohnter Sorgfalt einige Probleme unserer Textgruppe unter Berücksichtigung auch der nicht in CTH 626 gebuchten Texte besprochen. Nach der Veröffentlichung dieser Festschrift sind bereits zwei Editionsبände von Bogazköy-Texten erschienen, die manche Fragmente, die zum nuntarrijašḫa-Fest gehören, enthalten. Im vorliegenden Kurzbeitrag beschränke ich mich auf einige Fragmente von IBoT IV²⁾ und ein anscheinend beinahe in Vergessenheit geratenes Fragment.

1. KUB LV 5 + IBoT IV 70 (CTH 626 I 4)

Das vor einigen Jahren publizierte Fragment KUB LV 5³⁾ gehört der Textgruppe der "Übersichtstafeln" (CTH 626 I) an, die den Festverlauf Tag für Tag in knapper Form beschreiben, weist eine andere Numerierungsweise der Festtage als KUB IX 16 sowie KBo III 25+ auf und steht in dieser Hinsicht eher IBoT II 8 nahe. Nun enthält die Ende 1988 erschienene neue Edition IBoT IV einen Text (Nr. 70), dessen Zugehörigkeit zum AN, TAḪ.ŠUM-Fest bzw. nuntarrijašḫa-Fest H. A. Hoffner, der Autor des Katalogs dieser Edition, bereits (vor) 1980 erkannt hat⁴⁾. Nach meiner Feststellung schließt sich dieses Fragment tatsächlich an KUB LV 5 Rs.? III 7' ff. an und gibt noch drei weitere Zeilen. Wie bereits Ph. Houwink ten Cate vermutet hat⁵⁾, besucht die NIN. DINGIR-Priesterin (Z. 3', 14' = IBoT IV 70, 8')⁶⁾ zusammen mit dem König (Z. 8' = IBoT IV 70, 2') mehrere Tempel und verrichtet kultische Handlungen⁷⁾. Die Götternamen sind leider kaum erhalten⁸⁾. Jedenfalls handelt es sich hier um eine Übersichtstafel, die auf der Rs.? wenigstens drei Festtage beschreibt; dabei bleibt offen, ob der vorliegende Abschnitt, wie auch Houwink ten Cate ver-

mutet⁹⁾, gewisse Gemeinsamkeiten mit KBo XIV 76 Rs. III 1'-12' hat.

2. IBoT IV 71

Dieses Fragment erinnert an KBo XXII 228 (CTH 626 I '5'), insbesondere 1'-6'.

3. IBoT IV 80

Wie H. A. Hoffner bereits in seinem Katalog (S. XVI bzw. XXVIII) festgestellt hat, schließt sich dieses Fragment an KUB II 9 + KUB XX 50 + KUB XXV 19 + (CTH 626 II B + B') R. VI? 2.'-31' an; dabei ist allerdings auffällig, daß an der Autographie M. Erens zwei Paragrafenstriche, die zwischen Z. 22' und 23' und zwischen Z. 27' und 28' vorhanden sein sollten, fehlen.

19' I NINDA. KU₇ B [A. BA. ZA ŠA? UP-NI]

20' I DUG_{hal}-u [a-at-t] al [-la LĀL]

21' I DUGKUR₄. KU [R₄ G] Ú GID. DA GE [ŠTIN]

22' A-NA DINGIR^{M[E]}Š É. DINGIR^{LIM} da[-a-i]

23' I NINDA. KU₇ BA. BA. ZA ŠA UP-N [I]

24' I DUG_{hal}-ua-at-tal-la LĀL

25' I DUGKUR₄. KUR₄ GÚ GÍD. DA A-NA AŠ-[RI^{HI} A]

26' ir-ḫa-u-ua-an-zi ti-ja-a [n-zi]

27' nu AŠ-RI^{HI} A ir-ḫa-an-z [i]

28' ku-u-uš-ma NINDA. KU₇^{HI. A} DUG_{hal}-ua-ta [l-la]

29' DUGKUR₄. KUR₄^{HI. A} an-na-la-za

30' Ú-UL e-eš-ta [d][UTUŠI -at-kán]

31' mTu-ut-ḫa-l [i-i] a-a [š LUGAL GAL]

32' [D] UMU mḪa-at-tu-š [i-li LUGAL GAL]

33' [EGI] R-an-[da] [d]a-a-iš

Z. 20': DUG_{hal}uattalla-. Zur Etymologie des Wortes s. zuletzt A. J. Van Windekens, Gs KERNs (1981) 329f. (<* H₂el-; vgl. ḫi-el-ua-ta-al-la KUB XVII 37 I 6, s. dazu E. Laroche, RA 46 (1952) 162). Vgl. N. Van Brock, RHA 71 (1962) 89; S. Košak, THeth 10 (1982) 173 u. J. Tischler, HEG I 139.

Z. 21': DUGKUR₄. KUR₄. Eine Belegstellensammlung findet sich bei Y. Coşkun, Boğazköy

Metinlerinde Geçen Bazı Seçme Kap İsimleri, Ankara 1979, 59-62 (DUGḪAB. ḪAB). Die Gleichsetzung mit akkad. KUKKU(B)BU, die F. Sommer—H. Ehelolf, Pap (1924) 57, vorgeschlagen hatten, und die allgemein akzeptiert worden war¹⁰⁾, ist von O. Carruba, StBoT 2 (1966) 10f., wegen des Nebeneinanders der beiden Wörter in KBo XIII 144 II 16f. (// KBo XV 24 II 46')¹¹⁾ teilweise in Frage gestellt worden¹²⁾.

Was die sumerische Lesung des Logogramms anbetrifft, hat B. Landsberger den rekonstruierten Eintrag MSL VII (1959) 82, 111: [dug]. hab. hab=[ŠU-pu] (gemeint DUGḪAB. ḪAB=ḫapḫappu)¹³⁾, der seinerseits auf diri V 266: [ḫa-ab-ḫa-ab]=[DUG. ḪAB. ḪAB]=ḫap-ḫap-pu basieren dürfte, in MSL IX (1967) 189f. aufgrund des Eintrags in dem neuen Fragment S₂₉: dug. LAGAB^{kur} [kurLAGAB]=[ŠU-ru] richtiggestellt, eine richtige Gleichung DUGKUR₄. KUR₄=gugguru in Z. 111 angesetzt und diesen Eintrag mit gugguru in Z. 87-89 identifiziert¹⁴⁾. Daraus, daß die Einträge Z. 89f. die Gleichung dug. níg. ta. kur₄=gu-ug-guru=ku-ku-pu geben, ergibt sich mindestens mittelbar die Gleichsetzung DUGKUR₄. KUR₄=kukku(b)bu¹⁵⁾, was die Gleichsetzung von Sommer—Ehelolf, die auf dem Wechsel der Schreibungen DUGḪAB. ḪAB und DUGKU-KU-UB in Duplikaten und auch auf der Komplementierung DUGḪAB. ḪAB^{UB} beruht, bestätigt. Beim Fall, den O. Carruba herangezogen hat, handelt es sich wohl um eine Schwankung der Schreibung zwischen dem Sumerogramm und dem Akkadogramm, obwohl die Möglichkeit, daß die beiden Gefäßnamen nicht völlig identisch sind, nicht ganz ausgeschlossen wird¹⁶⁾.

Der letzte der hier transkribierten Abschnitte ist von E. Laroche 1975 im Zusammenhang der sog. Kultreform Tuthalijas IV. verwertet worden¹⁷⁾. Die dortige Umschrift ist aufgrund des Zusatzstücks wie oben gezeigt zu verbessern:

“(28') Diese süßen Brote, ḫaluattalla-Gefäße (29') (und) Kannen aber (30') existierten früher nicht. 'Meine Sonne' (31') Tuthalija, der Großkönig, (32') der Sohn Ḫattušilis, des Großkönigs, (33') 'setzte' sie später¹⁸⁾”.

Schon früher aber haben sich seine Vorgänger auch darum bemüht, das nuntarrijašḫa-Fest zu erneuern bzw. zu erweitern. Ḫattušili III. hat mindestens einen Teil des Festes neu geregelt. Die Stelle KBo XXX 77 Rs. IV 20'—24' führt die Erneuerung der Feierlichkeiten für ḫIB diesen König zurück. Sein Vater Muršili II. hat auch der Aussage von KU BIX 16 (CTH 626 I 1 A) Rs. IV 2'-10' zufolge wahrscheinlich nach einem Feldzug das nuntarrijašḫa-Fest erneuert¹⁹⁾. Was die Regierungszeit Šuppiluliumas I. anbetrifft, hat man keinen direkten Beleg für das Fest; wenn er aber nach dem Bericht seines Sohnes Muršili II. das AN. TAḪ. ŠUM-Fest im Frühling gefeiert hat²⁰⁾. und wenn spätestens Muršili II. die beiden Feste im Frühling und im Herbst gefeiert hat (s. Anm. 19), so dürfte man dar-

auf schließen, daß bereits Šuppiluliuma I. das nuntarrijašha-Fest als die Entsprechung des AN. TAḪ. ŠUM-Festes im Herbst veranstaltet hat. Ein Teil des Festes ist wohl sogar auf die althethitische Zeit zurückzuführen, wie z. B. das sprachlich ah. Stück KUB XI 34 (CTH 626 V 1 A) schließen läßt²¹⁾.

4. IBoT IV 81

Die Frage, die H. A. Hoffner in seinem Katalog (S. XVI bzw. XXVIII) gestellt hat, ob sich dieses Fragment und KBo III 25+ (CTH 626 I 1 B) zusammenschließen, muß man jetzt positiv beantworten. Das neue Fragment gibt den rechten Teil der ersten sieben Zeilen von Vs. I, wobei der Wortlaut von der Ergänzung von H. Otten-Chr. Rüster, ZA 64 (1975) 246 leicht abweicht.

CTH 626 I 1 B=34/t²²⁾ + KBo III 25 + IBoT IV 81 + KUB X 48

Vs. I

1 [ma-a-]n LUGAL-u [š la-aḫ-ḫa-az ú-iz-zi A-N] A DINGIR^{MEŠ}

2 [EZE] N nu-un-tar-ri-i [a-aš-ḫa-aš i-i] a-zi

3 URUKa-a-ta-pi I-NA [UD. IKAM šal-li a]-še-eš-šar U [D?. IKAM]

4 lu-uk-kat-ti-ma ^dZi-it-ḫ [a-ri-ja-aš] I-NA É-r [i ?]

5 [pa-iz-z] i nu-uš-ši DUMU. LUGAL EG [IR-an pa-i] z-zi nu EZE [(N-ŠU)]

6 [(I-NA É. GAL^{LIM}-m)[a ? šu-up-pa ṽa-a [r-pu-] u-ṽa-ar U [(D?. IIKAM)]

7 [(lu-uk-kat-ti-ma-)a] z LUGAL-uš ^dU NIR. GÁL [i-i] a-zi EGI [R-(an-da-aš-kán)]

8 [(ne-ja-at-t)] a-at ^dZi-it-ḫa-ri [(-ja-aš URUḪa-ak-ku-ra pa-iz-zi)]

9 [pa-r] a-a-ma-aš URUTa-ta-šu-n [(a pa-iz-zi UD. IIIKAM)]

Z. 4: Das Zeichen nach dem É ist trotz des vorangestellten I-NA angesichts des in KUB IX 16 Vs. 4 (Dupl.) hinter dem I-NA É zur Verfügung stehenden kleinen Raums²³⁾ und der Parallelstelle ABoT 14+ V 12' -20',²⁴⁾ die in Z. 14' eindeutig I-NA É-ŠU hat, wohl -r [i] zu lesen²⁵⁾; wenig wahrscheinlich wäre É ḫu [-uḫ-ḫa-aš]²⁶⁾.

5. LAAA 3, Nr. VI

1910 hat Th. G. Pinches neun in Liverpool befindliche Boğazköy-Fragmente veröffentlicht²⁷⁾,

die anscheinend im allgemeinen wenig Aufmerksamkeit gefunden haben. Unter diesen Fragmenten nennt eines das nuntarrijašḥa-Fest namentlich. Es handelt sich dabei um ein kleines Fragment (o. c., Pl. XXVII/No. VI und S. 105), das einen Teil einer rechten Kolumne mit Rand darstellt.

x +1	[—] zi
2'	[—] ma? x ²⁸⁾
3'	[]

4'	[] x-[š] a?-ra-az ²⁹⁾
5'	[—] zi
6'	[g]iš ŠUKUR dKAL ³⁰⁾
7'	[—] zi

8'	[EZEN nu-un-tar]	ri-ja-aš-ḥa-aš
9'	[] x
10'	[URUZi-i]	p-pa-la-an-da
11'	[EZEN nu-]	un-tar-ri-ja-aš-ḥa-aš
12'	[É (GAL) A-B]	U BI-TI-pát
12'a?	[]

13'	[] URUḤa-at-tu-ši
14'	[UR]	UNe-ri-ik
15'	[] -pát

(Hier bricht das Fragment ab.)

Der Paragraph Z. 8'—13' erinnert uns mit der Erwähnung des Festnamens [EZEN n]untarrijašḥaš (Z. 8', 11'), des Stadtnamens [Zi]ppalanda (wohl [dU URUZi]ppalanda zu ergänzen?) (Z. 10') und des *ABU BĪTI* "Intendant" (Z. 12') vornehmlich an KBo XIV 76 (CTH 626 I 3) Vs. I 5'—11' (// KBo XXII 228 (CTH 626 I '5', 7'—12')). Der anschließende Paragraph Z. 14' ff. aber erinnert sowohl an Z. 3' f. des eben genannten KBo XIV 76 Vs. I, als auch an KUB X 48+ (CTH 626 I 1 B, s. oben unter 4.) Vs. II 20—23 ("16. Tag"). Es ist aber vorläufig fraglich, ob unser Fragment CTH 626 I zuzuordnen ist; es scheint mir angebrachter zu sein, es vielmehr zu einer Textgruppe wie CTH 568³¹⁾ zu stellen; dabei handelt es sich wohl um verschiedene kultische Zurüstungen (CTH 568 A IIIff. passim³²⁾).

Anmerkungen

* Die hier verwendeten Abkürzungen sind diejenigen von Chicago Hittite Dictionary, Chicago 1980ff. bzw. J. Friedrich –A. Kammenhuber, Hethitisches Wörterbuch, zweite, völlig neubearbeitete Auflage, Heidelberg 1975ff. Das Manuskript des vorliegenden Aufsatzes wurde am 30. November 1989 abgeschlossen. Mein herzlichster Dank gilt Herrn Prof. Dr. G. Wilhelm (Würzburg), der freundlicherweise das Manuskript durchgesehen und einige Verbesserungen vorgenommen hat.

- 1) S. H. G. Güterbock, JNES 19(1960) 89; ders., JNES 20(1961) 90; ders., NHF(1964) 68f.; ders., CRRAI XVII(1970) 177f.; V. Haas, KN(1970) 52-57; E. Laroche, CTH(1971) Nr. 626; ders., RHA XXX(1972) 115(Nr. 626); S. Košak, Linguistica XVI(1979) 55-64; V. G. Ardzinba, Ritualy i Mify Drevnej Anatolii, Moskva 1982, 18-26; Ph. H. J. Houwink ten Cate, Kaniššuar=FsGüterbock² (1986) 95-110; ders., FsOtten² (1988) 167-194; C. Karasu, Belleten LII/203 (1988) 407-428; M. Popko, AoF 13/2 (1986) 219-223.
- 2) M. Eren, İstanbul Arkeoloji Müzelerinde Bulunan Boğazköy Tabletleri IV, Ankara 1988.
- 3) Ph. Houwink ten Cate, FsGüterbock², 95³, 100m. Anm. 14; ders. FsOtten², passim; S. Kosak, ZA 76 (1986) 131; A. Unal BiOr 44 (1987) 476 f.
- 4) H. A. Hoffner, o. c., S. XXVIII.
- 5) Houwink ten Cate, FsOtten², 188.
- 6) Zu NIN. DINGIR vgl. Fr. Pecchioli-Daddi, Mestieri (1982) 419-424; dies., Hethitica VIII(1987) 361-379; dies., Eothen I (1988) 193-206; dies., OA 26 (1987[88]) 37-57; Sh. Bin-Nun, THeth 5 (1975) 191 f. Vgl. auch das akkadische Ritual der "inthronisation" der NIN. DINGIR aus Emar, s. D. Arnaud, Emar VI/3 (1986) 326-337; Nr. 369. Zur NIN. DINGIR in Mesopotamien vgl. J. Renger, ZA 58 (1967) 134-149.
- 7) Z. 9' = IBoT IV 70, 3': nu ša [1-1] i a-še-eš-šar [
Z. 10' = " , 4': EZE [N] -ŠU! I-NA É d[? ijazi]
Das hethitische Wort für EZEN ist Genus commune; vgl. die Komplementierungen EZEN-aš (Sg. A. c.) (KBo II 5 III 17; KBo III 7 I 14; KUB X 93 IV 4; KUB XIII 4 III 43; KUB XVII 10 I 19; KUB XIX 37 II 47), EZEN-as (Sg. N. c.) (KUB XIII 4 I 45; KUB XXXVI 97 Vs. 5'; s. H. Otten, OLZ 51(1956) 103) und EZEN-ni (Sg. D./L.) (KUB XXXVI 97 IV 4). Als die od. eine heth. Lesung von EZEN hat I. Singer, StBoT 27 (1983) 45, šijamana-(c.) mit gewissem Vorbehalt vorgeschlagen. Die luwische Entsprechung dafür ist ein i-Stamm; s. E. Laroche, BiOr 11(1954) 124 u. DLL (1959) 120.
- 8) Hoffners Ergänzung dZ [i-pár-ua_a-a] (s. XXVIII) ist m. E. nicht ganz sicher. dZ [i-it-ḫa-ri-ja] ist auch mindestens erwägenswert.
- 9) Houwink ten Cate, FsOtten², 188.
- 10) MSL VII (1959) 82, 111 m. Anm; HW¹ 309, 344; 2. Erg., 30, 33; AHw 500 b; CAD K. 499; H. M. Kümmel, WdO 7 (1973-74) 294. Allerdings kommt kukku(b)bu schon in aB Zeit vor (s. jetzt F. R. Kraus, AbB X (1985) 63, Nr. 55, 8 m. Anm. b.)
- 11) Vgl. auch KUB XLII 19 Vs. 2 u. 6.
- 12) Die Identität von DUGKUKKU(B)BU mit heth. DUGkattakurant-, die J. Holt, BiOr 15 (1958) 151 f., behauptet hat, ist auch bezweifelt worden; O. Carruba nennt DUGḫanešša- als einen möglichen Kandidaten; StBoT 2, 11.
- 13) Zu einem Vergleich mit eblait. ḫa-ba-ḫa-ba-ga/ḫa-ba-ḫa-bí "dein/mein ḫ". (M. Krebernik, Die

- Beschwörungen aus Fara und Ebla, Hildesheim 1984, 134 f.) s. P. Xella, SEL III (1986) 19.
- 14) Vgl. G. Pettinato, MEE 4 (1982) 304: 938 f.; AHw 296 a.
- 15) MSL IX 190; demzufolge CAD K (1971) 563 f.; AHw 1559 a, 1567 a (Nachtr.); S. Košak, THeth 10, 102 f.
- 16) Wir kennen z. B. ein DUGKUKKU(B)BU aus Eisen (s. J. Siegelova, Eisen(1984) 106f.), Während ein DUGKUR₄•KUR₄ aus Eisen nicht belegt ist; vgl. Coşkun, o. c., 60.
- 17) E. Laroche, La réforme religieuse du roi Tudhaliya IV et sa signification politique, in: F. Dunand und P. Lévêque (Hrsgg.), Les syncrétismes dans les religions de l'Antiquité, Leiden 1975, 87-95, insbesondere 89.
- 18) Vgl. A. Ünal, BiOr 44 (1987) Sp. 478f.
- 19) Außerdem erwähnt ein Fragment der Annalen Muršili II. (KBo XVI 15, 6f.) möglicherweise das nuntarrijašha-Fest (im Herbst); s. Ph. Houwink ten Cate, JNES 25 (1966) 169, 177 u. 185. In einem anderen Fragment derselben Annalen berichtet Muršili II. (KBo VII 17+XVI 13 I 3f.), daß er im folgenden Frühling das AN. TAḪ. ŠUM-Fest gefeiert habe.
- 20) KUB XIX 22, 1f.=Ph. Houwink ten Cate, JNES 25 (1966) 27.
- 21) Als späterer Zusatz sei vor allem CTH 626 IV genannt, wo die Sonnengötter von Arinna der verstorbenen Königinnen (Ḫalanni, Nikalmati, Ašmunikal, Duduhepa, Ḫenti und Tawananna) beopfert werden; wobei allerdings die Problematik um Ḫalanni, auf die ich an anderer Stelle eingehen werde, ungeklärt bleibt.
- 22) H. Otten - Chr. Rüster, ZA 64 (1975) 246 f.
- 23) Da z. B. in Z. 4 od. 6 das letzte Zeichen der jeweiligen Zeile zwar beschädigt ist, aber doch als solches erkennbar ist, darf man dementsprechend in Z. 5 hinter dem É nur noch mit einem Zeichen rechnen. Ph. Houwink ten Cate, FsGUTERBOCK², 100¹⁶, liest ^aZitharijaš I-NA É-[ŠU] paizzi. Die Lesung von S. Alp, Beitr 180 (É[^dZi-it-ḫa-ri-ia-aš?]), dem C. Karasu, Bell. LII/203 (1988) 410 m. Anm. 11 folgt, ist schon aus diesem Grund kaum möglich.
- 24) (12')^dUTUŠI-ma ku-ḡa-pi la-aḫ-ḫa-az ne-ia-ri/(13') nu ^dZi-it-ḫa-ri-ia-an ku-ḡa-pi/(14')I-NA É-ŠU tar-na-an-zi/(15') nu-uš-ši EZEN ku-in i-ia-an-zi/(16') nu X MÁŠ.GAL ḫal-ku-eš-šar IŠ-TU É.GAL/(17') A-BI ^dUTUŠI pi-an-zi an-tu-ḡa-aḫ-ḫa-an-ma/(18') ku-in IŠ-TU É.GALLIM A-NA DINGIRLIM/(19') [EGI] R-an u-i-ia-an-zi nu-kán GALḪI.A/(20') a-pa-a-aš aš-nu-zi; vgl. Ph. Houwink ten Cate, FsOTTEN², 181.
- 25) Vielleicht zu ergänzen: I-NA É-r [i-iš-ši]; vgl. J. Friedrich, HE I² § 361; H. Ehelolf, ZA 43 (1936) 185¹; E. Neu, Lok (1980) 28-30.
- 26) Zu É(GAL) ḫuḫḫaš "Haus des Großvaters" s. zuletzt A. M. Dinçol, Bell. LIII/206 (1989) 47f. Für die Belegstellen s. noch J. Friedrich, SV II 88² u. 168 m. Anm. 3; das dort genannte Fragment Bo 2687, das einen Traum Tutḫalijas (IV.) im É ḫuḫḫaš in Ḫattuša (Rs. V 7'-10') erwähnt, ist inzwischen von K. K. Riemschneider als KUB XLIII 55 veröffentlicht worden; zur Einordnung dieses Fragments s. E. Laroche, RHA XXX (1972) 108 (CTH Suppl. 434, 6) und H. Berman, FsGUTERBOCK², 34 m. Anm. 2. Vgl. noch KBo VIII 110, 5 u. KUB XI 10, 7.
- 27) LAAA 3 (1910) 99-106 mit Tafeln XXVI-XXVIII.
 Nr. I=VBoT 108
 Nr. II=Liv. 49. 47. 42; Gelübde an Šarruma von Gallazzuḡa und an IŠTAR (in Ḫattuša); s. J. de Roos, JEOL 25 (1978) 67-74; ders., Hettische Gelöbte (Diss. Amsterdam 1984) 318 f., 457 f.

Nr. III=ḫurr. Text.

Nr. IV; die Lesung PN ^mKu-ua-a [r-] ist schon deshalb fraglich, weil in den hethitischen Texten keinem phonetisch geschriebenen theophoren Element das Götterdeterminativ hinzugefügt wird; solche Schreibungen wie ^mRe-a-ma-še-ša-ma-a-i-^dA-ma-na (NH 1068), ^rPu-du-^dHé-bat (NH 1063) usw. begegnen uns in Boğazköy nur in den akkadischen Texten. Vgl. jedoch NH 84 u. J. Tischler, FsNEUMANN (1982) 445.

Nr. V: CTH 802, 2; s. R. D. Biggs, Ancient Mesopotamian Potency Incantations (TCS 2) 1967, 60 f.

Nr. VII: Festritual; Z. 3': ^dHal-ma-šu-^rit[-

Nr. VIII: Z. 3': ŠA É. LUGAL ar-kam-mu-u [š; s. j. Friedrich, SV I 34. Zu arkamma(n)-im allgemeinen s. A. Kammenhuber, HW² I, 302-4 und zuletzt S. Ono, *Oriente XXXII/1* (1989) 82-92; a. ist jetzt auch in einem Staatsvertrag Tutḫalijas IV. belegt; s. H. Otten, *StBoT B 1* (1988) 48 (II 23).

Nr. IX: CTH 568 'H', parallel zu A V 12'-20'; s. H. Berman, *JCS 34* (1982) 123; ugl. Ph. Houwink ten Cate, FsOTTEN², 170⁸.

28) Pinches liest GAL.

29) ON?

30) GIŠŠUKUR ^dKAL "Lanze der Schutzgottheit" wird in den Texten zum AN. TAḪ. ŠUM-Fest (CTH 612: KBo IV 9 V 14; KBo XIV 35 I 8; KUB XXV 1 I 10; s. M. Popko, *Kultobj* (1978) 103f.) und zum KI. LAM-Fest (KBo XXVII 42 II 25=I. Singer, *StBoT 28*, 57, l. j. B.) als beopferter Kultgegenstand erwähnt; es handelt sich dabei um das Brechen von süßem Brot (NINDA. KU₇) für die Lanze. Eine umgekehrte Wortstellung (^dKAL GIŠŠUKUR) findet man in KUB X 21 Vs. II 5: (4)... GAL DUMUMEŠ É. GAL-ma-an (=NINDA. KUR₄. RA KU₇, Z. 2) (5) A-NA ^dKAL GI[ŠŠU] KUR pár-si-ia...; vgl. F. Sommer, *ZA 46* (1940) 25. Auch im Ḫuḡaššanna-Ritual kommt diese Gottheit bzw. das Symbol der Gottheit vor (KUB XLVI 18 Vs. 14'; auch 19 Rs.? 10'; vgl. H. Otten, *ZA 66* (1976) 299; J. Siegelova, *Eisen* (1984) 136.). In KUB XL 110 Rs. handelt es sich beim Auftreten von ^dKAL GIŠŠUKUR nicht nur um Brotopfer, sondern auch um Trankopfer mit Rhyton (Z. 2' f.); zu diesem Text vgl. H. Otten, *IM 17* (1967) 58. [Nachtrag: Vgl. jetzt auch P. Cornil, *OLP 19* (1988 [1989]) 20f.]

31) S. Anm. 27, Nr. IX; vgl. auch I. Singer, *StBoT 27* (1983) 134-6. Diese Textgruppe, die Orakelanfragen über verschiedene Feste, Anweisungen sowie Kultinventare (?) enthält, bedürfte einer gesonderten, gründlichen Untersuchung unter Berücksichtigung sämtlicher Duplikate.

32) Auch CTH 629=KUB XXV 27 ist in diesem Zusammenhang zu berücksichtigen.